

---

# 戦え、日本錬金術協会力ガク部

naonao

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦え、日本錬金術協会力ガク部

### 【Nコード】

N8386E

### 【作者名】

naonao

### 【あらすじ】

時は20XX年。突如、世界中の子供たちが異能の力に目覚めた。主人公、坂野雪那もその一人。そんな彼らが、巻き起こすドタバタ学園コメディー。

## 序章

この世に神とは居るのだろうか？

「雪那さん！姫ちゃんに何て事を教えてるんですか！！」

俺の目の前には、巨大なガスバーナを構え、今にも俺を殺してくれやがりそうな、銀髪、幾十にもロールしたドリルヘアーを持つ女。

「落ち着け！！俺は何も教えていない！！多分、犯人はそこに居る似非関西人だ。」

俺は、椅子に腰掛け、ゲームに興じる男を指差す。

「ゆっきー！！うちを裏切るんか！！」

耳にはピアスの穴、右目は黒、左目は青のオッドアイ。そして、男の癖に一人称が『うち』という、ちよっぴり不良っぽい男。

「裏切るも何もないやろ！！お兄が悪いんじゃないか！？」

関西弁、日本人形のような愛らしさを持つボブカットの少女。

「マスター、『どりるへあー』とはどういう意味なのでしょう？」

俺の事をマスターと呼び、金色の目を持ち、髪が腰まで有る少女。

「姫、ドリルヘアーとは掘削機のような髪型の事だ。」

「そうそう、昔流行った貴族の髪形の一つだ。」

身長は俺より少し低めの丸眼鏡をつけた少女と、室内は冷房が効いているからといえ、外はまだ暑い中、黒スーツを身に纏う青年。

こんな性格や容姿、性別が違う俺等にも、一つの共通点がある。

右手の甲に刻まれた赤色の六芒星。

俺は、この六芒星の御蔭で、今この場に居て、こいつ等と話しているのだ。

思い返すとこの一週間、色々な事が有ったな・・・

## 第一話 覚醒

目覚し時計のムカツク電子音が目を覚ませと鳴り響く。

俺、坂野雪那は目覚し時計のボタンを殴って止め、朝食を取りに一階へ降りる。

階段を降りる時、今日は何時もには無い違和感を体を感じる。

右手が重い・・・頭が重い・・・全身がダルイ・・・  
結論、風でも引いたのか？

一階に下りると居間のテレビではニュースが流れていた。

今年度のノーベル賞受賞者が映っていた。

ノーベル化学賞を貰ったのは子供。

銀髪でここ最近では絶対流行りそうに無いドリルな髪型。

化学と言わず、物理学賞、生理学賞、医学賞の受賞者が子供。その中、文学賞と平和賞だけが大人である。

これは、ここ最近では見なれた光景である。

「あなたも神の使いに選ばれたら御母さん嬉しいのに。」

若作りかつ年齢を考えると言いたくなるほどに、かわいいアニメキヤラのプリントされたエプロンを着た母は無理な願望を言う。

「はいはい、無理な願いを言わないの。俺が選ばれる訳無いだろ。」

『神の使い（アルケミスト）』に選ばれる子供は約一万人に一人と言われており、その上、選ばれる条件がまったく不明である。

国籍、人種、宗教、貧富、性格、性別を問わず選ばれており。普通に暮らしていて選ばれた者もいれば、怪我をした時に選ばれた者もいるし、拳句の果てには少年院の中で選ばれた輩もいる。唯一分かっている事といえば、選ばれた者には共通して、右手の甲に赤色の

六芒星が突如刻まれるという事である。

そして、神の使いと呼ばれる子供達は、突如、『錬金術』と呼ばれる不可思議な力を行使出来るようになった。

錬金術と呼ばれるそれは、子供達に様々な力を与えた。

ある子供は、プロセスを無視して、化学薬品の精製をすることが出来て、またある者は、物質を熱エネルギー無しで液体や固体、気体に変える事が出来る。

何故神の使いと呼ばれるのかと言うと、三年前に地球温暖化の影響で、海面上昇、砂漠化問題、異常気象と数多くの問題が発生し、地球は後十年持つかどうかと言われている時に、能力に目覚めた子供達が、その能力を行使し、数多くの環境問題を解決したからである。それゆえに、神の使いと呼ばれるようになったのだ。

これが、政府の公表している数少ない神の使いの情報。

まあ、情報によると、俺にも神の使いになる可能性が無いと言う訳ではないのだが、確立は商店街の籤引で一等を当てるより低い。ちなみにここ最近の戦績は、十回引いて、十回とも白玉。つまり、全部ポケットティッシュだ。

「そうよね。あなたが選ばれるなら、世の中の奥様方のお子様全員が選ばれるわよね。」

物凄いわかつく事をいけしゃあしゃあと宣ってくれやがる。この性格が無ければかなり良い母親だと思えるのだが・・・

「で、朝食は？」

「出来てるわよ。トーストと目玉焼きよ。冷めないうちに食べちゃいなさい。」

「ほい。」

雪那は朝食の乗った皿を受け取り、朝のニュースを見ながら食事を取り始める。

ノーベル賞受賞者の発表が終わると、今度は神の使いの誘拐といったニュースが始まる。

大手企業等からは神の使いの錬金術の力は喉から手が出るほど欲しい物である。この力があれば、新しい商品の開発、低コスト生産といった物が可能となり、ライバル会社により優位に立てるからである。だから、拉致し、薬漬け等にして洗脳するといった事をやらかす組織は少なくも無い。

その為過去に何度もこの様な事件が起きている。これに対し政府は『神の使い保護法』といった法を新たに設立したりと様々な対策を練っている。

うむ、拉致されたりするぐらいなら絶対成りたくないな。

そんな事を思っていると、朝の喉かな空気に妹の鳴き声が響き始め、階段を駆け下りる音がし始める。

「・・・どうしたんだ？」

「さあ？」

ドタドタドタ！！

足音が接近し、居間の扉がバンと開かれ、少女が手にハムスターを乗せて部屋に入ってくる。

「モコが〜！！」

妹の雨美<sup>うみ</sup>の手に乗っているハムスターはどうやら御臨終の様らしい・

・

参ったなあ・・・この間から調子が悪いと思ってたら大霊界に旅立たれたか・・・この場を誤魔化して十代目モコこと、モコにそっくりなハムスターをまたペットショップに購入に行かないと。

俺は母さんとアイコンタクトでそれを伝達しあい、その場を誤魔化す事にした。

「雨美、落ち着くんだ。モコは今冬眠をしているんだ。だから、死んでるんじゃないぞ。」

「今・・・夏だよ・・・」

雨美は泣き目を擦りながら突っ込みをいれる。さすがは、我妹、突っ込んでくれるじゃないか。

今は12月なのに何故夏なのかと聞かれたら、天変地異の爛発により、地軸にずれが発生した為である。そのせいで、オーストラリアと日本の季節が入れ替わってしまった。

そして、サンタさんの服装も入れ替わった。長袖のふかふかコートから、滅茶苦茶ラフな半袖のアロハシャツを着るようになった。乗り物もトナカイと橇の代わりに海豚とサーフィンボードになった。だが、季語は変わってない為、以外と古典がややこしい。

「済まん間違えた。夏眠だった。ハムスターは暑い所に住んでるから、気温が暑くなると良く眠るようになるんだよ。ほら、御兄ちゃんがクーラーの無い部屋で勉強して、良く息絶えてる様に。」

「・・・うつ・・・じゃあ、モコは大丈夫なの？」



「そうよ。ほら、モコは御兄ちゃんに押し付けて、早く着替えてらっしゃい。」

「うん！！御兄ちゃん、モコを預かってて。」

食事中の俺にハムスターの屍骸を押し付け二階の自分の部屋に駆け戻る雨美。食事中に屍骸を押し付けないで欲しい。食べる気が無くなるんだが・・・

それにしても、九代目モコよ、良く頑張った。3ヶ月も生き長らえたのは新記録だ。初代なんて、雨美の可愛がり過ぎで、ストレスによる発病で寿命（我が家に来てから）僅か3日だったなあ・・・それよりも・・・本当に死んでるのかこいつ？

雪那はモコの白毛の腹をつんつん突付く。しかし、まったく動こうとしない。

ああ・・・本当に亡くなられておられる・・・俺は大して可愛がっていないので、愛着とかは一切無いが、悲しいと言えば悲しい。一寸の虫にも五分の魂。

俺は、九代目モコの死体を優しく撫でる。すると俺の右手が赤く光り輝き始めた！！オイッ！！何だこりゃああああ！！？

皿洗いをしている御母さんもその光を見て、洗ってる皿を落としてしまう。

赤い光が収まると、手の中で数時間前に大霊界に旅立たれていたモコが動き出したではないか！！

んなにつ！！モコよ、生きておられるじゃないか！！

モコは自分の命の恩人のような目で雪那を見、雪那の手の中で丸く

なりすやすやと寝始める。

「雪那、右手を見せなさい!!」

ゴキッ!!

御母さんは無理矢理右手を捻って甲を見ようとした為、不吉な音を立てる。

だが、それは今回無視しよう。

俺の右手の甲には今話題の赤い六芒星が何時の間にか掘り込まれていた。

「あらー!!雪那、凄いいじゃない!!」

御母さんは何時もの三倍増しのお星様を眼の中で光らせていた。

「一先ず、日本錬金術師協会に電話しないと!!それと、今日の晩御飯は赤飯よ!!」

日本錬金術師協会とは、日本に存在する神の使いを管理する協会で、世界錬金術師協会の支部の一つである。このような機関は世界中に存在しており、世界中でこれらは神の使いの情報をリンクしている。もしも、神の使いが発見された際は、これらの機関に報告する義務が国民には設けられている。理由は神の使いの保護である。

「はぁ・・・」

ふと、壁掛け時計に目を移すと時計の針は八時をまわっていた。

「やばっ!!遅刻になっちまう!!」

雪那は慌ててモコをテーブルの上に置き、トーストと目玉焼きを口に詰め込み、鞆を手に持ち家を出る。

駆け足気味に走りつつ、感慨深げに自分の右手の甲を見る。

うゝむ・・・俺が神の使いに目覚めるとは・・・以外と言うか何と言うか・・・しかし、ついつい嬉笑いをしてしまう。神の使いはその名の通り、人々にとって、天使に等しい存在である。自分はその存在になったのだ。

周りの人が微笑を漏らす俺を気味悪げに俺を見るが、そんな事気にしない！！なんとって、今日は気分が良いからなあ。

学校に到着し、俺は早く学校が終わり、日本錬金術協会の使者が来るのが待ち遠しかった。

拉致られるくらいなら神の使いに成りたくないとは思いつつも、自分も気高き力が欲しかった。これは人間としては普通だろう。

人とは高みを望む欲深い生き物である。だから気高く誇り高き力を欲するのは世の摂理である。

そう言えば、先程から周りが騒がしい。恐らくクリスマスパーティーの打ち合わせだろう。

と、そんな事を思っていると、俺の所にドドドッとクラスメイトが押し掛けてくる。

「雪那！！その刻印は本物なのか！？」

普段は余り話さないような奴までも中にはいた。

「ああ・・・」

俺が肯定すると、周りの奴らはざわめき始める。

「すげー!!!生で錬金術つてのを見せてくれよ!!!」

ここまで盛り上がると力を見せないと収拾は取れないであろう。  
だから、俺は力を見せる事にした。

まず、屍骸を発見しなければ成らないので、教室をその場で見渡す。  
教室の後ろの棚に生物の先生の持ってきた蝶の標本を発見。  
俺は、蝶の標本として飾られている一匹（紋黄蝶）を優しく手に取る。

そして、『蘇れ』と念を込める。

手の甲が赤く輝き、光が収まると同時に手の中から、標本として飾られていた蝶が、元気良く羽ばたき教室の天井付近を飛びまわる。

それを見た生徒は歓声をあげる。

蝶はやがて飛び疲れたのか、俺の肩にゆっくりと止まる。

「これで、良いか？」

「すげー!!!もつと見せてよ!!!」

・・・標本の中全てを復活させると？面倒臭い。

「悪いが、この力は12時間間を置かないと再度使えないんだ。」

嘘を吐き、この場を誤魔化す事に。

「なんだ」。しかし、凄いな。人間も生き返らせる事出きるの？」

人間を・・・生き返らせる・・・できるのだろうか？でも・・・そんな事できたら・・・拙くない？

雪那は自分の力の可能性に恐ろしく思い始めた。

「分からん。一先ず、今日日本錬金術協会の使者が来るから、それでチェックしてもらう。」

「そうか・・・頑張れよ。」

何時も、良く話す友達達が、俺の肩に手を置き、口々にエールを送ってくれるのだが・・・中には「寂しくなる。」という輩もいる・・・  
てっ！！

「ちょっと待て！！寂しくなるってどう言う事だ？」

「えっ、雪那知らないの？神の使いに選ばれた者は、監視を楽にする為に一箇所に集めるんだよ。」

友達の中でもかなり親しい森塚が説明しつつ、鞆から地図表を取り出す。

地図表のとあるページを捲り、日本列島から少し離れた所にある巨大な島を指差す。

その島にはEDENとローマ字で書かれていた。

「ここ、エデンに收容されるんだぞ。まあ、日本国内に限り外出は可らしいぞ。色々制限を受けると思うが頑張れ。」

親指を立て哀れむような目で俺を見る・・・

「えっ・・・」

洒落にならん・・・今の生活を捨てて、収容されんの・・・

## 第二話 部活見学（前編）

それからは時間の流れが早かった。先程まではゆっくりだったのが、今度は超特急の速度で時間が過ぎていく。

そして、気付いたら放課後。俺はゆっくり家に帰ろうと思って、学校の外に出ると一台の黒塗りのベンツが俺の前に止まる。

ベンツの中から、見た事も無いほどの美人と俺と同じ年くらいの丸眼鏡をつけた少女が出てくる。

「坂野雪那さんですね。私、日本錬金術師協会部長、鳳凰寺ほうおうじ 時雨しぐれと申します。御家までお送りしましょう。」

「時雨ちゃん真面目にやつてるねえ。雪那君よ、支部に来て時雨ちゃんのダメダメさに失望しないでくれよ。エデンの外限定で何時も真面目なんだよ。あつ、僕は朋来ほうらい 鈴音すずね 階級は座天使スローンズ、天名は『ラミエル』だ。」

ラミエル・・・？天使の名前？

「ああ、ラミエルというのは、七人の天使の一人で神の雷霆を意味する雷の天使だ。つまり、この様に・・・」

鈴音は、メダルのような物をポケットから取りだす。それと同時に、指先に紫電が走り、メダルが宙に浮かぶ。

そして、硬貨を撃ち出した。

んなっ！！超電磁砲か！？  
レールガン

硬貨は民家の屋根の上において此方を覗つていた不審者を的確に撃ち

抜く。

打ち抜かれた不審者は、数メートル吹き飛び屋根から落ちて、見えなくなった。

「電気を操れるわけだ。時雨さん、拙いですよ。かなりの数に囲まれてます。一先ず車の中に。」

急いで車の中に三人は乗り込む。時雨の合図と共に運転主 高校生くらいの青年、しかも黒スーツを着ている が車を出す。

「ところで・・・雪那君、もしかして、教室で錬金術を皆に見せた？」

先程まではさん付けだったのに、何時の間にかフレンドリーに君付けである。

「見せました。」

「どんな力？」

「生き物を復活させる力です。」

「あんらゝ・・・そんな力聞いた事無いわよ。でも、それならここまで集まるのは納得ね。」

人差指を顎に当てて笑う時雨。

「軍事関係、葬儀関係に狙われまくりですね。」

「何故に葬儀関係!？」



「死者が復活したら葬式いらすだろ。」

成るほど・・・以外にがめついな、葬儀屋業界。

「しかし、これでは親族への挨拶は難しいですね・・・どうします？」

青年が口を開く。

「大丈夫よ。テレビ電話を持ってきたから。はい。」

俺に手渡されたのは、A4サイズのPCのような物。

「その小さいボタンを押してみて。」

指示通りボタンを押すと、画面に御母さんと親父が映る。

『雪那、頑張りなさいよ。御母さんと御父さんは全然寂しくなんか無いから気にせず行って来なさい。』

「散々な事を言うなあ・・・ま、あんたからまともな台詞を聞ける事は期待して無かったがな。で、雨美の奴は何て？」

『モコがいるから御兄ちゃんは居なくても良いって。』

ああ・・・俺の存在はハムスター以下ですか・・・こら、その三人笑うではない！！

『まあ、風邪とかに気を付けて頑張りなさい。次こっちに帰って来

る日が分かったら直ぐに連絡しなさいよ。町内奥様ーズ全員で出迎えてあげるから」

町内奥様ーズ！？何だそれ！？

「ああ、切るぞ。」

『ええ。』

『あれ、御父さんのお話は！？おい、雪那！！御父さんの話をプチッ。プープープー』

親父の話しは長いから却下だ。

「さて、お話は終わった様ね。今から、エデンに飛ぶわよ。綾斗、能力を使いなさい。」

「へいへい・・・部長は人遣いが荒いですね。」

綾斗と呼ばれる青年の手が赤く輝く。それと同時に車の前方に黒い歪みが発生。

車は止まる事も無く、前方の歪みの中に入って行く。そして、歪みを抜けるとそこは・・・巨大な街だった。

「エデンにようこそ。坂野雪那君。我々は貴方を歓迎します。」

時雨は雪那に手を出す。

「此方こそ宜しく願います。」

雪那は握り返した。

「さて、まずは部署案内ね。雪那君の能力はどうみても・・・」

「カガク部だな。」

「そうねえ・・・あそこしかないわね。」

科学部？

「はあ・・・それより質問を宜しいでしょうか？」

「良いわよ。」

「先程の御二人のは本当に錬金術なんですか？電気を放つたりとか、時空に穴を開けたりとか。」

それを聞いて、時雨は笑い出す。

「何で、笑うんすか！！」

「御免御免。ちょっと雪那君面白すぎ。あなたは政府の流している偽りの情報を本当に信じているのね。」

偽りの情報だと・・・

「どう言っ事ですか？」

「教えてあげるわ。ここ最近まで頻繁に発生していた自然災害は『墮天使』と呼ばれる、未確認生命体の起こしていた物なの。しかし

政府はそれらの生物を公開するのを恐れたの。そして、運の良い事にそれと同時に各地で異能の力に目覚めた子供達が出現したの。政府はこれらの子を集めて、対未確認生命体用の軍隊を作ったの。それが世界錬金術協会。子供を徴兵したとばれたら洒落にならないから、一部の異能の力を化学や医学幅広い分野に使用し、発明機関と言う名の隠れ蓑を手にしたの。」

「つまり、世界を良くする為に創られたと言うのは嘘で・・・」

「そう、錬金術、正確には『<sup>プレス</sup>恩恵』と呼ばれるこれらの力は、化け物を倒す為に存在する力。そして、この機関は軍隊なの。」

「つまり、俺は軍に入れられて、良いように使われるって事か？」

「いいえ。戦闘に参加するかどうかは自由意思よ。最近出沒してるのは、貴方達が発明した兵器で十分倒せてるから。戦いの大半は大人達がやってるわ。」

ふん・・・しかし、未確認生命体ねえ。こんな異能の力が有るんだから居ても可笑しくは無いか。

「じゃあ、俺はこの力を戦争に役立てなくても良いと言う事か。」

「戦争って言い方は好きじゃないわ。まあ、貴方が役立てたいと思うなら使いなさい。こちらは強制はしないわ。」

なら良いか。もし、自分の力で蘇った人達が戦いでまた死ぬってのは嫌だしな。

「あとね、プレスについて少し話しておこうかしら。プレスには『

「干渉型」、『変異型』の2種類が有るの。大抵の人は干渉型と呼ばれる、物質や理に干渉しそれらを書き換える力を持っているの。でも、稀に変異型と呼ばれる、体の仕組みその物を神の使いとして目覚めた時に書き換えられた人も居るの。鈴音ちゃんが良い例ね。」

干渉型、変異型ねえ・・・あれ、何で朋来さんは変異型なんだ？

「朋来さんは、どうして変異型なんですか？」

「それに付いては僕自身が話そう。僕の体には『発電柱』と呼ばれる物が体中に存在している。発電柱とは電気鯨とか電気鰻の持つてる発電器官のことだ。これを振動させ私は発電を起こしているのだ。」

「へえ・・・体の方は大丈夫なのか？体内発電してるんだし。」

「馬鹿かね。電気鯨や電気鰻が自分の発電した電気で感電死なんて聞いた事無いぞ。つまり、僕の体全てが創り変えられているのだ。」

成る程・・・これが、変異型か。・・・でも、何故公表しないんだ？

「質問二つ目。何故、世間には変異型は公表しないんだ？」

「あのねえ、少し考えれば分かるでしょ。体の大半を創り変えられた子供達は人間と呼べると思う？それでなくても、ハンセン病患者ですらあの扱いよ。変異型の中には体をゲル状にしたり、姿を変えられたりと明らかに人間離れした人も居るのよ。そんな人達も居ると公開してみなさい・・・」

「成る程・・・世間から迫害を受けそうですね。」

「そういう事。さて、私は貴方の発見報告などをしないとイケないから・・・鈴音と綾斗、せつちゃんの部署案内御願いね。」

せつちゃん・・・名前ぐらいまともに呼んでよ・・・

「了解。」

時雨は車に積んでいる書類等を手に持ち、車から降りて近くのビルに入っていく。

「さて、ここから一番近い所と言えば・・・」

「生物部だな。俺、朝倉の奴とあんまり話したくないんだけどな・・・」

「僕も少しパスかな・・・でも、案内は必要だしね・・・」

二人の話から推測すると、朝倉と言う人は厄介な人なのだろう。どの方面で厄介なのかは知らないが・・・

「そんじゃ、車出すよ。」

綾斗は再度車を発進させる。

「注意事項な。生物部部长、朝倉あさくら 尚紀なほきには気を付けろよ。直ぐにあいつのペースに持って行かれるから。」

「はあ・・・」

「まあ、百聞は一見にしかず。見たら分かるよ。」

それきり、会話が途絶えたので、俺は周りの景色を見る事にした。ビルなどの建造物も多いが、以外と自然も多い。自然が多い所には虫などが飛んでいるのが見える。

景色を楽しむ事3分。車は一際大きなドームの前で止まった。

「でかあゝ・・・」

雪那は巨大なドームを見上げ感嘆の声を漏らす。

「ここが、生物部だ。部室の大きさは東京ドーム二個分に相当する。部員は七名。部長はさつきも言ったが朝倉尚紀、副部長は大海紫苑<sup>おん</sup>。」

綾斗はカードのような物をポッケから取りだし、タッチペンでカードの表面を弄りつつ説明を始める。

「あゝ、そのカードみたいな物は何ですか？」

「ああ、これか。これはPDA（個人用形態端末）と言ってな。これ1枚で、本部及び支部の情報端末にアクセスしたり、内部の者との通信ができる。他にも給料が振りこまれ、これで御買物ができる。」

「給料？こことて、給料が貰えるんですか？」

「当たり前だ。君は時雨ちゃんの言ってた事を既に忘れたのかね。ここは、一応は軍だ。給料が出て当たり前だろ。」

成る程・・・防大みたいだな。

「さてと、中に入るぞ。」

入り口は鋼鉄の引き戸で、ドアを開けると奥には更にドアがある。入り口のドアを閉めて、奥のドアを開けると、更に奥にドアがある。

「ここは、実験動物とかが逃げ出したらいけないから、厳重なんだよ。」

確かに。実験動物に逃げられた日にはどうなるか分かったもんじやない。その動物が強暴なら、怪我人が出るし。空を飛ぶ場合はエデン外に出られ、生態を崩す可能性がある。

5度目のドアを開けると、辺り一面が緑に包まれていた。一言で言うとうとジャングル。上を見ると見た事も無いような美味しそうな果物がぶら下がっていたりする。

「尚紀！！新しい天使が見つかったから見学させに連れて来たぞ！！」

綾斗は両手をメガホンの様に型作り口に当て、叫ぶ。

「ほーい！！今行く！！」

ジャングルの奥から声が返って来る。そして、白衣を身に纏い、モノクル 片眼鏡のこゝを付けた少年が小走りにやってくる。そして、尚紀は雪那の前に立ち、実験動物を見るかのようにまじまじと雪那を見る。



「この子が新しい天使かな。僕の名前は朝倉尚紀。智天使で『ザフキエル』っていう通り名を持ってるんだ。あつ、ザフキエルっていうのは神の知恵って意味だよ。で、この子は何所に配属なの？」

「ああ、あつちのカガク部だ。」

「成る程・・・僕達の方にも階級の高い天使が欲しいよ。カガク部ばつかずるいよ、本当に。」

「いや・・・生物部はお前と紫苑が居るから十分だろ。七人しかないのに智天使と座天使が居るじゃないか。保安部よりマシだぞ。」

「でもねえ・・・欲しい物は欲しいんだよ。ところで君、名前は？」

「坂野雪那。その、階級とかはまだ不明です。って言うか、そのシステムすら教えてもらっていませんので・・・教えていただけますか？」

「そう言えばそうだったねえ・・・と言うか、これくらい自分で分かって欲しい物だ。」

鈴音の言葉に賛同する綾斗と尚紀。

「階級とは読んで字の如く、能力者の能力の強さを表している。無印、大、権、能、力、主、座、智、熾の順に階級は高くなっていくんだ。階級が高いと給料も多い。天名とは通り名と思ってくれ。分かったかね？」

「ああ。」

「それは良いとして、綾斗。面白い生物を創ったんだけど見る？」

目を輝かして綾斗に詰め寄る尚紀。

「今度は何を創ったんだ？この間みたいに、ハリネズミに毒を持たせたような危険生物じゃないよな？この間みたいに、迂闊に触って危うく他界しかけたくないぞ・・・俺は・・・」

・・・ハリネズミに毒ですか・・・って言うか他界って・・・相当危なかったんですね・・・綾斗さんが尚紀さんに会いたくない理由が少しどころかなり分かりました・・・

「大丈夫だつて。今度のはゴリラの手の数を二本増やして、その先にドリルを付けただけだから　ゴリラ＋ドリルでドリラかな。やっぱりドリルと自爆装置とレーザーは男のロマンだね。」

ドリラ・・・悪趣味な生物だな・・・

「おい！！そのゴリラって・・・アフリカの大使が絶滅しかけてるから繁殖を手伝ってくれて連れてきた・・・あいつか・・・」

「勿論　遺伝子は組替えてないから、子供はちゃんとしたのが生まれてくるよ・・・多分。」

滅茶苦茶だ！！この人！！国際問題だろそれ！！

「さつさと元に戻せ！！大使が見たら卒倒するぞ！！」

「ええ・・・折角、これから軍事部の開発した自爆装置やレーザーを取り付けようと思ってたのに。」

そんな物を取りついたら、最早ゴリラじゃないぞ！！いや、既にゴリラじゃないけど・・・

口先を尖らせ不平を述べる尚紀。

「自爆装置って・・・君はそんな物を付けて何する気なんだね？ゴリラを連れ帰る大使を爆殺する気かい？」

呆れ半分に尋ねる鈴音。その質問に尚紀はニツコリ笑い・・・

「いや、秘密裏にジャングルに返してあげるつもり。」

おいっ！！ジャングルで探検したら、手にドリルを付けたゴリラに会ったらマジで恐怖物だぞ！！

雪那はゴリラがドリルをギュインギュイン回転させながら、ゴリラ特有の走り方で追いかけてくるのを想像し身震いをする。

「マジで止めろ！！マジで、お前にそんな能力を与えた神を俺は怨むぞ。」

「それ程でも。わっはっはははは」

「誉めてねえよ！！くそお、こいつと話していると、いつか脳の血管が切れてしまいそうだ。時間が押してるから次行くぞ。あと、お前はゴリラをちゃんと戻せよ！！」

行くぞと綾斗が手で合図をして、部屋から出ていく。雪那と鈴音は綾斗の後を追うように部屋から出て行く。

それを尚紀はニコニコ笑いながら眺めつつ・・・

「ど、ど、ドリル どどど、ドリル」

謎の歌を口ずさみつつ、ジャングルの奥にスキップをしながら戻った。

ドリラがゴリラに戻った戻らなかったはまた別の話。

「3」

「2」

「1」

「どつかーん！！」

尚紀「わーい なぜなにカガク部！！」

鈴音「皆集まりたまえ。僕のレールガンで眉間を打ち抜かれなくなかったら。」

尚紀「なぜなにカガク部の時間です。これは、『戦え、日本錬金術協会カガク部』通称『カガク部』で使われた様々な用語を説明する小説のおまけみたいな物です。」

鈴音「今回は数名程作品中にてマダ出てないので、参加できなかったから、今回は僕と尚紀と後ろで縛られている綾斗の3人でさせてもらう。」

綾斗「ふがー！！ふふね！！ほへをほへ！！（うがー！！鈴音！！  
縄をとけ！！）」

鈴音「解いたら君が逃げるだろ？さて今回の用語は・・・」

尚紀「男のロマン『ドリル』だね」

鈴音「科学と一切関係ないな。」

尚紀「良いんじゃない？どうせこれと言った、難しい用語はないし  
ね。」

鈴音「ふむ・・・許可しよう。」

尚紀「ドリルとはボール盤の穴あけ用切削工具のことで、刃部の形  
は主に『ねじれぎり（ツイストドリル）』『平ぎり』『特殊ぎり』  
の3種類が存在しているんだな。」

鈴音「私たちが普段漫画などで良く目にするのは、2本の溝が彫つ  
てあるツイストドリルの方だ。」

尚紀「ドリル良いよねえ 男のロマンだよね」

鈴音「僕は女だぞ？」

尚紀「うん、そうだったね。まあ、今回は1回目だし、これで終了。  
」

鈴音「うむ、そうだな。そろそろ、昼食の時間だし帰るとしようか。」

「

収録スタジオから出ていく2人・・・

綾斗「ほれほ、ふぁふぁえるな――――！！（俺を、忘れるな――  
――！！）」

## 第二話 部活見学（前編）（後書き）

今回からなぜなにカガク部というものをやらせてもらいました。聞きたい事とかあったら、コメントに書いてください。なぜなにカガク部で説明しますんで・・・

### 第三話 部活見学（中編）

暗い暗い部屋。無数のモノリスがそこには有り、モノリス自身が微弱な光を放ち、モノリスだけは辛うじて見える。

「また、日本での発見報告かね。」

「はい。ブレスの能力は、死者の復活。」

それを聞き、暗い会場に並ぶモノリスがざわめき始める。

「熾天使クラスのブレスじゃん。羨ましいなえ〜。伊太利亜支部では、能天使が最高位だよ。というか、日本は力を持ちすぎ。こつちに一人分けてよ。」

「ダメです。」

「時雨のけち〜。」

「今回発見された天使、『坂野雪那』の能力は誠に危険な物である。それにより、彼を階級『熾天使』、天名『ヤオエル（小さな神）』と定める。異議申立てが有る方はどうぞ。」

一際巨大なモノリスは威圧的に言い放つ。このモノリスの声の主こそが、世界錬金術協会のギリシア本部の本部長で有る。

多数のモノリスが異議が無い。

しかし、少数だが中には異議を申し立てる国もある。

そういった国は、自国に熾天使どころか智天使が一人もいないよう



な国である。日本は発見された天使の数は他国と比べると少数では有るが、発見された天使の大半が中級天使以上である。上級天使が一人も居ない国にとっては面白く無い物である。

しかも今回発見された天使は上位中の上位、最上位の熾天使である。発見された熾天使は雪那を除いて現在7名。所有国は、亜米利加が2名、日本、中国、独逸、仏蘭西、希臘が1名ずつ所有している。アジアの小さな島国で世界で7名しか発見されていない熾天使が2名も選ばれてる事をやっかみ、異議申立て等をして、せめて智天使でも良いから階級を落とそうと嫉妬交じりに少数の支部が頑張っている。

しかし、本部長はやっかみなど御見通しか、彼等をあえて無視。

「これで、今回の天使の発見報告及び階級付けの話しを終える。続いては、墮天使の発見報告について話を開始する。」

「露西亞支部だが、昨日領内の海中内で墮天使を発見。直ちに軍を動かし撃退し、ソロモンの指輪に封印を施した。」

「西班牙支部ですが……………」

次々と各支部のモノリスが自国領内で発見されて欲しくない奴の報告を始める。こっちは発見されて欲しい天使と比べ、出るわ出るわ。天使の発見報告は絶対だが、墮天使による緊急発見報告会合は上級でない限り無いのはこれが理由だ。

「日本支部ですが、3日前に3匹ほど発見。軍の代わりに保安部を動かし、封印に成功。」

そして、各支部の発見報告が終わると、辺り一面のモノリスが一瞬

にして消え、部屋に明かりが灯る。  
会合が終わったのである。

「うーん！ー終わったあ　しかし、ヤオエルねえ。会合では言っていないけど、日本の『ラジエルの書の断片』によると彼は『アダム』なんだけどなあ。ま、そんな事を言つと雪那君は殺されちゃうしね・・・これで良いのかな？」

時雨はぼそつと呟く。そして、PDAをポケットから取り出し何処かに連絡を取り始める。

「私。もうそっちの方には雪那君来た？・・・まだ。そう・・・彼の事に付いて少し教えて上げとくね・・・彼は・・・」

「くそー！！だから俺はあいつに会いたく無かつたんだよ！！」

「まあ、これでも飲んで落ち着きたまえ。」

生物部のドーム付近にあった自販機で購入した冷たい炭酸飲料を綾斗に手渡す鈴音。ちなみに、雪那もちやっかり奢ってもらっている。

「おつ、気が利くな。」

綾斗はハンドルを片手で捌きつつジュースを一気に飲み干す。

「くはー！！やっぱ、夏はこれだよな。」

「親父臭いぞ。雪那君もそう思うだろ。」

俺に話題を振るなよ！！

「良いんじゃないですか？俺だってけっこうしてますよ。風呂上りとか。牛乳ですけど・・・」

「ほら見る。男にとってこれは常識なの。女が見知らぬ男に体を触られて痴漢と叫ぶくらい普通なんだよ。」

えっと・・・それとこれは同一視したらいけないだろ。犯罪行為と一緒にするな。

「僕は叫ばないぞ。」

「へえ・・・」

「触った瞬間そいつを叫ぶ間も無く他界させてやるから。」

こえ・・・そう言えば、朋来さんって体内発電できたんだっけ・・・

「あっはっは、そうだったな。アメリカ支部の奴が来た時、執拗にお前の体触ってた時一度最大放電でぶつかましたんだったな。雪那君、アレは凄かったよ。その触ってた奴も変異型で体の大半がゴムに創り変えられていた奴でな。絶縁体であるゴムでできた人間が感電死しかけたんだぜ。本当面白かったな、アレ。」

面白いか・・・

「次は何所に行く？」

「ここからだ、軍事部だな。保安部も近くに有るが、こっちは僕達が話せば済むだろう。」

「じゃあ、軍事部に着くまで保安部の話をしてやる。保安部つてのは、墮天使と戦ったり、他の部の人や要人の護衛をする仕事だ。部長は鈴音で、俺が副部長だ。」

へえ・・・時雨さんは日本支部の部長だけに護衛も凄かったんだ。日本最強の二人が付いてんだし。

「部員数は化学部に継いで多く、14名だ。ただし、最高位の天使は鈴音ちゃんで座天使。人数は多いけどあまり強い能力者が回ってこないんだよ。理由は君と一緒に。誰も化け物と戦いたくないんだよ・・・」

「へえ・・・でも、何で数は多いんですか？」

「危険手当などが有って給料が多いんだよ。化学や医学等に通じた能力者の場合、開発費などが貰えるけど、俺みたいな明らかな戦闘向け能力はそう言う金が殆ど貰えなくてな、だからだ。それと、俺の家、親父が早く死んでるから御袋が一人で弟や妹の養育費とか稼いでるからな。少しでも多く家に仕送りしたいしね。」

「僕の場合は、完全な趣味だ。」

後者の戦闘狂はほっとくとして、綾斗さんってかつこいいなあ。家の兄弟や母親の為に命をかけて戦うのかあ。俺にはできそうに無いぞ。

「綾斗さん、頑張ってください。」

エールを送ったからといって、綾斗さんが楽になるわけではないが送る。

「ありがとうございます。おっと、軍事部に着いたぞ。」

「でかつ！！これって生物部よりでかいですよ！！」

軍事部の部室は、生物部の部室より巨大であった。

「うん。軍だからね。やっぱり、保安部と軍事部はその点優遇されてるんだよ。」

「へえ……」

「そんじゃ、中入ろっか。」

軍事部は、生物部のように幾十のドアとかが有るわけではなく、網膜センサーがついており、それで部外者が内部の物をチェックしている。

綾斗がセンサーに目を近づけると……

『保安部の黒宮綾斗様ですね。どうぞ。』

女性の声の機械音声が鳴った後、ドアがスライドする。

おお！！以外と近未来的な！！

俺は中に入って最初に巨大な機械に目が行った。

それは、巨大な人型ロボット。正確に言うとパワードスーツの一種。『セレスシャル・サーバー（天空の救援者）』、通称SSと呼ばれる物で有る。昨年開発された人命救助用の機械である。ヘリや人が危なくて近付けない場所等に安全に入り迅速に救助する為の物である。

俺もTVや雑誌などで良く取り扱われるのを見たことがあるが・・・こいつは違う・・・

「綾斗さん・・・これSSじゃないですよね・・・何ですか？」

「おつ、気付いたか。お前結構この手の物が好きなのか？空が喜びそうだな。これはな・・・」ちよつと待ったー！！」

こつちの方に資料等を抱え走って来る、一人の女性。

「私が説明するわ。貴方が、新しく発見された子で、坂野雪那君でしよ。貴方に着いての情報は尚紀から貰ったから、説明はいらないわ。」

次々に早口で捲し立てていく女性。

「あの・・・御名前は？」

「あつ、私の自己紹介がまだだったわね。っていうか、鈴音と綾斗、私についての紹介ぐらいしときなさいよ。私は蒼井あおい空からって言うの。『そら』じゃなくて『から』だからね。」

手をこちらに差し出したので、俺は握り返す。

「手の肉刺が凄いわね・・・剣道か何かしてた？」

「ええ、家が薙刀の道場でして。親父に昔から鍛えられてまして。」

「薙刀ねえ、以外とマイナーな武術だな。」

「綾斗よ、そうでもないぞ。僕の実家よりはマシだ。」

朋来さんの実家って何してるんだろ？ 凄い気になる。だって、どうやったらこんな戦闘狂が生まれるんだ？

「で、話を戻すわ。これは最近、独逸が亜米利加のSSを対墮天使用に改良した兵器。製品名『ハイメル・リッター（蒼空の騎士）』、略してHR。そして、この子は独逸から貰ったデータを元に我々が造り上げた純日本製のHR、機体名『焰鬼』よ。」

SSを兵器に転じた物・・・考えてみればそうか・・・今まで転じられていなかった方が可笑しいんだし。

それより、焰鬼・・・何故、妖怪の名前？ しかも、機体の色が青だし・・・

しかし、これには重大な欠陥が有る事に俺は気付いた。

「でもこれ・・・パイロットが入るコックピットが、小さくありません？」

「いいとこに気付いたわね。これはLBS（Link Brain System）と呼ばれる装置を搭載しており、HRと操縦者をシンクロさせて動かすからね。それにより、動作の誤差は10のマイナス9乗秒まで減らす事に成功。ただし難点を上げるとすると、機体との相性があるのよね。」

「はあ・・・つまり、従来のSSには有ったコックピット内部のレバーやそれに順ずる物は無くなったから、コックピットが小さくなったと。」

「正解。三重丸+花よ。」

「へえ・・・」

雪那は感嘆の声を上げ、HRを見上げる。

その手の物が好きな雪那にとって、焰鬼は素晴らしい物に見えた。

「鈴音、来年には最終整備を終えれそうだから、対G訓練とかちゃんとしときなさいよ。」

「分かっている。それと、リニアガン等の武器をメインに積んどいてくれ。僕のプレスさえ有れば電気は無尽蔵に造れるからな。」

「分かったわ。バッテリーとかも少なめにして、軽量化も図つとくわ。」

「頼むよ。」

「ほれ、次は医学部の方に行くぞ。」

腕時計をちら見し、時間が押して来たのに気付き、綾斗が次の部に行くぞと促す。

「坂野雪那君、旧型のSSなら結構余ってるから、暇な時に来なさい。乗せてあげるから。」



「本当ですか!!」

喜色満面、雪那の顔がぱーっと輝く。

「勿論よ。ただし、年を明けてからね。今は焰鬼の最終整備があるから、そっちの方で手が一杯なのよ。」

「はい。」

「良かったな。」

雪那達が出ていった後、空は怪しく微笑む。

「あの子なら・・・きつと乗れる筈よ・・・『夜叉』に・・・」

空は焰鬼の隣に置かれている布に包まれた巨大な何かを見る。

「オペの最中？」

「そうなんです。総理のオペの最中です。誠に s o r r y ・何ちつて。」

行き成り寒いギャグをかましてくれる、看護服を着た少女。

「お前の寒いギャグを聞きに来たんじゃない。・・・だれか、医学部について説明できる奴はいるか？」

少女は目を輝かし、人差し指で自分を指差すが・・・

「・・・副部長以外で。」

「私を無視！？あえて、無視！？副部長を無視ですか！？良いですよ・・・所詮私は御飾りの副部長ですよ・・・あなたと違って、御飾りですよ！！」

ぐすん・・・と床にのの字を書き始める少女。

「綾斗さん・・・この人誰ですか？」

「ああ、こいつは、医学部副部長の木戸　このみ（きど　このみ）。こいつのプレスは、寒いギャグだ。」

「違うよ！！そんなプレスで副部長が勤まると思うなよ！！」

両手を上に突き上げ抗議。

「効果は、患者を次々と凍死させる事ができる、アルティメット・スローター・アビリティー究極殺人能力だ。」

何気にかっこよく、究極殺人能力の部分だけ英語で言う鈴音。

「鈴音ちゃんと綾斗君の馬鹿！！女の子を虐めるのは最低なんだよ！！」

「そうだよ。レディーは虐めちゃダメだよ」

にゅっという擬音と共に何処から湧き出てきて、このみに加勢する奴が一名。

「尚紀！？何でここに！？」

神出鬼没な登場をする、生物部部长に驚く綾斗と鈴音。声に出してはいないが、雪那もかなり驚いている。

「僕が必要らしくてね。特別に御手伝いに来たの。」

「そういえば、尚紀さんのブレスってどういう力なんですか？」

「雪那君、良くぞ聞いてくれた。僕のブレスは、『拒絶を拒絶』する力なんだ。」

拒絶を拒絶？能力の時点で矛盾してるぞ・・・

「この世には様々な拒絶がある。僕はその拒絶を無い事にできるんだ。例えば、拒絶反応とかね。」

「凄い力ですね。」

素直に凄いと誉める。

だが、反面頭を抑える人が二人。鈴音と綾斗である。

「そのせいで、理解不能なミュータントが次々生み出されてんだよ。」

「うむ。君の力は保安部でも使ってみたい。謎生物で小隊を作ってみたいし。」

「止めてくれ。それより、尚紀。お前は手伝いに来たのじゃないのか。」

「あつ、そうだったね。じゃ、また後で」

尚紀は建物の奥に小走りで向かう。

「じゃあ、まったり見学していきます？御茶と御菓子くらい出すよ。」

「いや、急いでるから止めとく。部長の顔だけ見せとく。」

「ああ・・・スージー君の顔だけ・・・それってホラーだよね。」

スージー君？日本支部なのに外国人もいるのか？

「医学部部长、ほねかわ骨皮すしえもん筋右衛門で愛称スージーなわけ。」

そんな疑問を感じてる事に綾斗は気付き、笑いながら説明をしてくれる。

「凄い名前ですね・・・名付け親の顔が見てみたいです。」

「そんじゃ、二階に昇ってスージーの顔を見ていくか。」

皆が、何か企んでる笑いをしながら、俺を二階に誘導する。スージーさん・・・一体どんな人なんだ・・・  
そして・・・次回に続く・・・

「3」

「2」

「1」

「どっかーん!!」

尚紀「なぜなにカガク部!!」

鈴音「今回は2回目をやらせてもらっ。」

尚紀「今回の御題は『ソロモンの指輪』」

鈴音「前回に引き続き、科学は一切関係ないな。」

尚紀「まあね・・・」

空「じゃあ、説明するわよ。大天使ミカエルがソロモン王にあげた刻印の彫られた指輪がソロモンの指輪と後に呼ばれてる物で、その指輪には悪魔を役する力があつたとされており。その力で、ソロモンは『ベルゼブブ』『アスモデウス』『ベリアル』といった、有名な悪魔を役したとされてます。本作品中での、ソロモンの指輪は、世界のあちらこちらに出現した墮天使を封印する為の道具のことです。」

尚紀「そんなこと、誰でも知ってるんじゃないの？指輪の前にソロモンって名前もついてるし・・・」

鈴音「僕もその指輪が欲しいんだが・・・最近綾斗が、僕から逃げるし・・・パシリ体ていの男の癖に・・・」

尚紀「綾斗は良いパシリになるよね プレスも結構便利な物を持ってるし。」

空「私も、たまに利用させてもらってるわよ。」

尚紀「最後に聞くけどさぁ・・・雪那は『なぜなに科学部』に出てこないの？主人公なのに。」

全「・・・」

#### 第四話 部活見学（後編）

そんなわけで二階に昇り・・・ガラス越しにオペルームを覗いたのですが・・・医師の中に一人程、病人がいるじゃねえかよ！！

忙しくオペをしている3人の医師の中に、一人ほど、点滴台と一緒に行動している、ミイラみたいな奴がそこにはいた。

「あのミイラが、骨皮さんですか？」

「そうそう。名前通り骨と皮だけだろ。」

確かに・・・でも、骨と皮だけじゃないよね 一応、目とか臓器も有るんだし  
(屁理屈)

しかし、驚くべき所は、ミイラ男がオペをしている所ではない。  
ミイラ男の手が患者の腹部に切開をしても無いのに埋まっている事である。

「骨皮さんのプレスって・・・物質通過ですか？」

「おっ、かつこいい呼び方をするじゃん。」

「僕のプレスにもかつこいい呼び方を付けてくれたまえ。」

電気びりびりとか言った日には明日を拝めそうに無いな・・・  
っていうか、変な事言えないし・・・

「止めときます。」

「ケチだねえ。さて、部長の顔も見た事だし、次行くよ。綾斗、化学部の方へ先に行くだろ。」

「そうだな。」

「あつ、私も行きたいです。」

「却下だ。」

「行きたい、行きたい、行きたいです!!」

床に大の字になって暴れ始める、このみ。

お前は欲しい物を強請るガキか!?

「分かった。条件付で許可する。」

このみは直ぐに暴れるのを止める。

「お前の親父ギャグで雪那を笑わす事ができたら連れて行ってやる。それでどうだ?」

えっ、またあの寒いギャグを俺に聞けと?

「ふふふ、受けて立とうじゃないか。私の取っておきを披露してあげよう。本来ならクリスマスパーティーで使う予定だった物を今ここで披露してあげよう。」

結構です・・・と言えない自分が悲しい。



「ゴホンッ。」

あえて空咳をし、間を作り・・・

「ニューヨークの叔母は入浴中か！！なんちつて。雪那君、面白かった？」

やべえ・・・ニューヨークじゃ無くて、北極が見えた・・・

「もしかして、面白く無かったの・・・」

目を涙で潤ませ、つぶらな瞳でこちらを見るのを止めてくれ・・・そんな事をされたら普通の人なら、面白くないって面と向かって言えなくなるぞ・・・

「面白くない。却下だ。」

言っちゃったよ、この二人！！

「がーん！！」

天を仰ぎつつ、その場に倒れ伏すこのみ。

つて、お前もリアクション良いなあ・・・

「じゃあ、次行くぞ。」

時間が押していると言う事も有り、綾斗さんのプレス、『超多時間理論の圧縮』で化学部前に一飛びをする。

化学部は医学部同様、他の部のように　といっても、保安部は見えない　ドームではなく、いかにも研究所ですと言えるようなコンクリでできた建物である。

そして、化学部の入り口には一人の男が立っていた。

「どうも、化学部に見学に来られたそうですね。僕は化学部部長の御津甲斐みつかい 俊介しゅんすけと言います。中をご案内します。ついて来て下さい。」

無駄に丁寧な言葉だな。化学部か・・・俺はここに入部するんだっけ？　なんか、優しそうな人だなあ。

「そうそう、エデンの各部長、副部長は変人ばかりでな、こいつは唯一のまとも君。ちなみに変人街道を最もまっしぐらしてる馬鹿は尚紀だな。あいつは、天使に選ばれる前から変人だったしな。」

「知りあいだったんですか？」

「ああ。3年前つまりここに来るまえ、同じ中学だったんだよ。クラスも幼稚園の頃からずっと一緒。ちなみに、自宅のアパートの部屋も隣同士だ。」

へえ・・・意外な接点。しかし、同じ中学で2名も選ばれてるって、凄い低い確率だよな・・・しかも、幼馴染って言うし・・・

「ところで、綾斗。僕はまともな方に入るのか？」

「入らんな。」

綾斗が否定すると同時に、綾斗の隣を何かが高速で走る。

「おっと、綾斗君。君の傍を蚊が飛んでいたので処分させて貰ったよ。ところで、僕はそっちの方に気が行って聞いて無かった。もう一度言ってくれたまえ。」

「入ります!!」

命が惜しいのか即肯定・・・  
そして、それを見た俊介は・・・

「御二人さんは本当に何時見ても仲良いですね。」

仲良く見えますか？俺にはライオンとシマウマ　つまり、捕食者と餌　に見えますが・・・

「勿論だとも。保安部のもつとうは、仲良し小好しだからね」

「怪我と死と部長の暴力とな・・・」

ボソツと愚痴る綾斗。綾斗さん・・・本当に御疲れ様です。

この二人のせいで中々話が進まない事に俊介さんは怒ったのか、俺の所に近付いてくる。

「本当に面白い方々ですね。えっと、尚紀さんから坂野さんの事は多少お聞きしております。御名前の方は何とお呼びしたら好いでしょうっ?」

訂正・・・全く怒ってません。この人、かなり人ができてます。

「えっと、雪那で良いです。えっと・・・」

あなたって、言うのはちょっと失礼だよな・・・何て言えば言いんだ・・・

「俊介で良いですよ。親しい人は、シュンって呼んでます。」

やべえ、この人やっぱり人ができてる。あそこの馬鹿と違って・・・

ちらつと馬鹿<sup>すずね</sup>を見る。それに気付いた、馬鹿はニヤツと笑い・・・

「僕の魅力に惚れたか？」

科を作る・・・止めてくれ・・・お前に俺が惚れる事は、ノストラダムスの予言が当たる可能性より低い。

俺はあえて馬鹿を無視し、俊介さんと話しを続ける。

「俊介さん、で良いですか？」

「俊介で良いよ。さん付けって、ちょっとムズ痒いから。綾斗、部活の案内に使える時間はどれくらいだい？」

「ちよい待ち・・・ここまで、プレスで飛んできた甲斐が有って、あと10分も有る。」

「そうかい。雪那君、ついておいで。部の仲間達を紹介するよ。」

「はい。」

俊介、俺、綾斗さん、朋来さんの順番に建物に入る。

「ここからは、他の組織等から機密保持の為通路が迷路っぽくなってるから、僕から絶対離れないでね。」

「はい。」「おう。」

・・・返事が二つ？

「馬鹿は！？」

同時に叫ぶ俺と綾斗さん。そして、後ろを向くと・・・馬鹿がいなかった・・・

「あらあら・・・まあ、朋来君の事だし、きっと先に行って御茶でも飲んでと思うよ。化学部に向かう道は一つだけじゃないから。もしも来てなかったら、僕が、PDAサーチで探しに行くから。」

「以外と冷静ですね。やっぱり、映画でも漫画でも、こういう人が最後に生き残るんですね。」

「いや、鈴音みたいな奴も、生き残りそうだよ。宇宙人や幽霊と一緒に主人公達の撃退をしそうだ。」

「ありうる！！あと、尚紀さんもしそうです。」

「確かに。しそうな例を上げると切りがないぞ。」

「こらこら、人の悪口は言ってはなりません。彼女達も、きっとそ

「の様な自体に陥った時は、人として敵の方にはつかないと思います。」

あなたは聖人君子か!?

「いんや、あいつなら、やってくれるね。」

頑なに自分の意見を貫く綾斗。

「きっと、彼女は仲間になった振りをして・・・」

話がどんどん変な方向に向かっていくような気がするので、修正を施さねば。

「で、化学部についての話なんですが。」

「あつ、そうだったね。」

ほつ、脱線した話を元に戻せた様だ。

「化学部は合計17名。主な活動は、新薬の調合や新元素の発見、他にも世の中の皆さんの役に立つ事をしております。副部長は砂野<sup>すなの</sup>神楽<sup>かぐら</sup>さんです。」

漸く、まともな部活紹介である。これまでの方々の説明は何所か抜けてたし・・・いや、それ以前に部活紹介ですらない。

自分の入る部がまともな所で本当に良かった。部長が尚紀さんや朋来さんだったら、一体どうなる事やら・・・

雪那は想像をして身震いする。

「着いたよ。皆、この子が、今日からエデンに加わる僕達の新しい仲間だよ。雪那君、自己紹介。」

最後の方は雪那にだけ聞こえる様に小さな声で話す。

「えっと、坂野雪那です。今日から、皆さんと同じ部活で頑張る事になるのですが・・・」

「ストップ。雪那、お前ここじゃないぞ。」

「もしかして、綾斗達、カガク部としか言ってないの？」

何だ？

「やべえ、カガク部としか言ってねえ。」

やっちまったと自分の髪をわしゃわしゃする綾斗。

「どうやらカガク部違いだね。」

「みたいだな・・・」

雲行きが怪しくなってきたぞ・・・

「雪那・・・お前が入部するのは、化学部じゃなくてカガク部なんだ。」

「はいっ？」

「えつとね。日本支部にはカガク部が二つあるんだよ。カタカナでカガクと英語でケミストリーの化学とね。」

「つまり、俺が入部するのは、カタカナの方のカガク部ですか？」

「その通り。」

・・・せつかく、まともな人が自分の部の部長だと思ったのに・・・

「あつはつは、馬鹿だな。綾斗おゝ。」

某部長の様に何時の間にか綾斗の傍に現れ、肩を叩く。

「貴様・・・何時の間に？」

「さっきからいたよ。と言うことで、この事は時雨ちゃんに報告させてもらうよ。勿論、責任は君オンリーで」

「そんな事できる訳ないだろ！！連帯責任だろうが！！」

「僕と時雨ちゃんは御風呂を供にする中だよ。僕の頼みなら、時雨ちゃんは分かってくれる筈。」

鬼がお前！！

「それより、次行かなくて良いの？もう、１０分経ったけど・・・」

「げっ！！雪那、急ぐぞ！！ドリルは遅刻したらグチグチうるせえからな！！」



ドリル・・・？もしかして、カガク部の部長ですか？掘削機のような人がカガク部の部長ですかよ！？

俺と綾斗さんは小走りで先来た道を戻りつつ、カガク部部長について話す。

「ドリルって、どんな人なんですか！？」

「髪型がな・・・」

ドリルな髪型・・・朝見たアレか・・・髪の毛が滅茶苦茶カールしてるアレか！？

「性格はまともですか？」

「一応な・・・でも、カガク部は面子も能力もかなり濃いいぞ。部員はお前を除き現在3名とエデンで最も小さな部活だが、ノーベル賞等の賞の受賞数は、今年1年で10近く取っていて、世界1位の實力を持つ集団だ。3人とも、各部の部長クラスのプレスを所有している。とくに部長は・・・」

俺が入って大丈夫な所かソレ・・・だって俺・・・理科は3科目とも2だぜ・・・

「まあ、話しの続きは自分で確かめろ。それと、もしもカガク部でやっていくのが無理と思ったら言え。保安部で引き取ってやる。」

「それは結構です。アレが部長なので。」

隣を何故か逆立ちで爆走しているアレを指差す。

「ふっふっふ、少年よ、照れるな照れるな。本当は僕とみっちり放課後課外授業をしたいんだろ？うりうり。」

足のつま先で、俺の横腹でなく・・・顔面を突付く朋来さん・・・

「雪那・・・崩課後加害授業と聞き、ちよっぴり期待した保安部の後輩達の話聞いてみたい？」

うん、聞かなくても分かります。その保安部の後輩の方々、マジでご愁傷様。それと、綾斗さん？今、崩課後加害授業って言いませんでした！？

「それと、もう1つ言いたい事が有るのだが？」

「下らない話しないでなら許可する。」

「うん、次回に続く。」

「「はぁー！？」」

「3」

「2」

「1」

「どっかーん！！」

筋右衛門「なぜなに力ガク部の時間です。ああ、皆さん丸々太っておられて、元気そうで何よりです。」

綾斗「いい加減、その台詞は止めろ！！お前より痩せている奴って、白骨死体しかねえだろ！！」

鈴音「身長164cm、体重27kgってどんなチートだね？」

筋右衛門「ええ、私は生まれつき、肥満抑制のホルモンが多量分泌されているせいで、常時満腹状態で食べ物を口にできないんです。だから、点滴で必要最低限の栄養を摂取し生きている状態なのです。だから、体重が軽いんです。」

綾斗「そうなんだ。ところで、今回は何について話す？」

鈴音「そうなんだよ。話題がないんだが・・・」

筋右衛門「では、今回はリサイクルについて話しましょうか？」

鈴音「リサイクルなら、僕も空き缶やペットボトルなどをちゃんとリサイクルしているぞ。」

筋右衛門「えつとですね。リサイクルはすればするほど、CO<sub>2</sub>が多く排出されるって知ってます？」

綾斗「マジで！？」

筋右衛門「では、ペットボトルを例えにあげますが。ペットボトルをリサイクルするのと燃やすのでは断然燃やした方がCO<sub>2</sub>の排出

量は少ないです。理由を述べますと、リサイクルするペットボトルを集めるのに車を走らせるので、それでまずCO<sub>2</sub>が出ますし、今度は砕いたり、溶かしたりする時にも機械を使うのでCO<sub>2</sub>が更に出来ますね。っていうか、リサイクルボックスに入れたものの全てがリサイクルされてるわけではありません。大半は普通に燃やされちゃってたりしてます。」

鈴音「なら、リサイクルボックスなんて置く必要はないのでは？」

筋右衛門「ええ、ぶっちゃけそうです。でも、一応リサイクルした方が良い物もあります。それはお忘れなく。」

綾斗「再生紙つてのが、環境に優しいって良く聞くけど・・・まさか、これも・・・」

筋右衛門「OUIです。寧ろ、再生紙じゃないほうが環境に優しいです。日本が再生紙なんかするから、一部の国では困ってたりするのです。日本の紙の為に栽培した木の一部が輸出できずに腐ってしまってますから。インドネシアとかの森林が減ってきてるのは、どっちかというと、焼畑とか海外輸向けの高老の養殖地を作る為に破壊された物の方が遥かに多いです。」

綾斗「質問、再生紙は何で安いんだ？リサイクルするのに沢山の燃料を使うのに？」

筋右衛門「それはですね。国が値段の一部を負担してますから。」

綾斗「へえ・・・」

鈴音「要約すると、リサイクルなんかするな。と言う事か？」

筋右衛門「まあ、そんな感じですね。それに、環境団体はリサイクルについては反対してますから。」

鈴音「ふむ。意外と勉強になったな。」

綾斗「ああ、確かに。」

筋右衛門「では、今回のなぜなにカガク部はこれで幕引きです。」

## 第五話 部活見学（終編）

・・・何ですか・・・ココ？

俺の目の前に広がるのは巨大な洋館・・・ここがカガク部の部室だそうなんだが・・・傍から見ると、悪の科学者が住むような、怪しげな研究機関にしか見えん・・・

「なにつて？ここが、カガク部の部室兼寮だ。敷地面積÷人数で言うと全部活中最大だ。しつかし・・・あいつ等、出迎えくらいしろつつの・・・何してんだ・・・」

「この時間だと、アレじゃないかな？」

綾斗は腕時計を一瞥し、納得。

「んじゃ、チャイム鳴らして入らせてもらうか。」

と言われても・・・肝心のチャイムのボタンが見当たらない。

「チャイムつて、何所を押すんですか？」

「ああ、ドアノブを触ると自動でチャイムが鳴るようになってる。」

そう言つて、ドアノブを掴む綾斗。綾斗の言う通り、ノブを掴むと同時に軽いチャイムの音が洋館に木霊する。

「ちなみに、エデンのメンバーとして登録されている者以外が触つ

た時は、保安部に通報が入るようになっていた。過去に何度か、企業や他国のスパイなどが進入してだねえ、それを狩るのが楽しかったものだよ……」

「ちなみにそいつ等の遺体……じゃなかった、身柄は拘束後、生物部に受け渡した。会いたかったら生物部に行ってみろ。きっと、ミニータント新生物になってるから。」

遺体！？殺しちゃったの！？しかも、遺体を尚紀さんに渡すって、その人達本当に踏んだり蹴ったりですね……

『黒宮さん？今ちよつと取りこみ中でして、用件を手短に言って下さいな。』

ドアの隣に付いているスピーカーから女性の声が発せられる。

「ああ、お前等の所に入部する、新入部員を連れて来てやった。」

『あら、そうです。今、鍵を開けますわ。』

言葉を言い終えるやいなや、カチツという音がし、ドアが自動で開く。

『エントランスから真直ぐに進み奥から三番目の通路を右に曲がり、その奥の大間に私達はいますわ。』

「あいよ。」

真直ぐに進み通路を曲がると確かに巨大なドアが有った。

「この扉を開くと同時にお前の新しい人生が始まる。だから、自分の手で開けな。」

「はい。」

そう、この扉を開くのを皮切りとして、俺のエデンでの生活が始まる……

雪那はドアに手をあて、力強くドアを開けた。

「『カガク部』にようこそ。」

部屋の中ではカガク部の部員と思われる3人が雪那を笑顔で迎える。

「あ、ありがとうございます……これから、宜しくお願いします。」

「こちらも宜しくお願いしますね。」

髪を今にも掘削機のようにギュインギュイン言わせそうなドリルヘアーをした女性が雪那に手を差し出す。

意図を察した雪那は差し出した手を握る。

「自己紹介から入りましょう。私の名前は海音寺・近衛・ランカスターと言います。近衛と呼んでください。天名はガブリエルで、階位は最上位の熾天使ですわ。ここ、カガク部の部長を任されてるの。わからない事が合ったら何でも聞いて頂戴。」

「ほんなら、次うちな。」



耳にはピアスの穴、右目は黒で左目は青のオッドアイ。そして、男の癖に一人称が『うち』という、ちよっぴり不良っぽい奴。

「うちの名前は、土御門<sup>つちみかど</sup> 大悟<sup>だいご</sup>や。大悟って呼んでな。天名はウジエルで、階位は智天使や。よろしゅうな。」

「宜しく。」

「最後に私ですね。」

着物を着ている為か日本人形を髣髴させるような可愛いボブカットの少女。

「私の名前は土御門 有香<sup>ゆか</sup>です。有香と呼んでください。天名はゾフィーエル。階位は座天使。付け加えると、先ほど自己紹介をした愚兄の妹です。」

顔に似合わず以外に毒舌だな・・・

「うちが愚兄やて？メツチャ良い御兄ちゃんやないか!!」

「何ゆうとんや。一人称が『うち』で、カラーコンタクトでオッドアイ真似てる兄を愚兄と呼ばんかったら何と呼べばいいんや?」

兄に対しては、『丁寧な言葉』のての字もない・・・っていうか、あのオッドアイは、カラーコンタクトかよ!!

「麗しい御兄様。」

「いっぺん死んでき!!」

「なんやて!？」

「はいはい。御二人さんストップですわ。新入部員さんが、自己紹介できなくて困っておりますわよ。」

近衛がこのままほっとくと、更にエスカレートしそうな2人を止めようとする。

しかし・・・

「うっさいわ、ドリル!! うちは、兄として妹の兄に対する態度を改めせんとあかんのや!!」

「ド・・・ドリル・・・キーーーーー!!! 私のは髪は掘削機ではございませんとアレほど言っているでしょうが!!」

・・・確かに他の部より濃いいな・・・

「俺等は、帰るな。雪那、これから頑張れよ。」

「頑張りたまえよ。」

厄介事は御免と、颯爽と撤退する綾斗と鈴音。

「って、帰るんかよ!! 止めるの手伝って帰れよ!! ああ・・・この状況どうすればいいんだ・・・」

大悟と有香の喧嘩に近衛が参戦し、喧嘩の激しさは増している。雪那はどうしようもないと判断した為、喧嘩が終わるまで待つことにした。

10分経過・・・

「良いですわね。私の髪を今後掘削機扱いしないで頂戴。良いわね？」

「分かった。有香は今後うちの事を愚兄扱いすんなよ。」

「うん。御免な。」

漸く終わったか・・・

「自己紹介をお願いしますわ。」

「坂野 雪那です。雪那は雪にどれと言う意味の那という漢字で書きます。天名とか階位はまだ分かりませんが、能力の関係でここに入部する事になりました。宜しくお願いします。」

「こちらこそ。雪那さん。」

「ゆつきー、宜しゅうな。」

「ゆ・・・ゆつきー？」

「そや。雪那の『せつ』が雪って漢字やからな。」

「お兄が変な徒名付けるけん、雪那さんが困ってるやないか。」

「変な徒名とは何や。うちなりに三日三晩しっかり考えたんやで。」

いや、会ったの今日が始めてだし・・・

「雪那さん。私の超愚兄が迷惑かけて本当に済みませんね。」

「いや、良いよ。別に気にしてないし。」

ピ。ピ。ピ。

何かの電子音が部屋に響く。

近衛はPDAを取りだし、画面を見る。画面には『時雨』の文字が。

「あら、時雨さんから連絡の様ですね。時雨さん、何ですか?」

『えつとねえ。もう、せつちゃんはそっちの方に来た?』

「ええ、来ました。」

『せつちゃんに代わってくれる。』

「かしこまりました。雪那さん。」

俺にPDAを手渡す。初めてPDAを持ったんだが、これ滅茶苦茶軽いな。小説一冊よりも遥かに軽い。

「雪那です。用件は何でしょう。それと、その呼び方は止めてください。」

『ええ・・・せつちゃんのイケズ』

「・・・」

『えつとね。坂野 雪那、貴方は本日付けで、天名『ヤオエル』階位は最上位の熾天使に任命されました。おめでとー せつちゃんのパDA及び制服等はあと30分もしないうちにとどこからね。それじゃ、また明日。』

プツン・・・

熾天使？俺が？

「ゆつきーが熾天使つちゅうのはビックリや。」

「世界で8人目の熾天使ですか・・・」

「せせせせせ、雪那さん、貴方の能力は何なのですか!？」

「えつとね、死者を蘇らせる能力。」

「なんですか、それは!! そんな出鱈目な能力は聞いた事が有りませんわ。」

「いや、十分お前の能力も出鱈目やと思うけど。」

「そもそも、死者の復活なんて、そんな捻破りな・・・」

「うちは無視ですか・・・」

うちいらな子と指でのの字を床に書き始める大悟。

「雪那さん、凄いですね。じゃあ、規則に従いまして、お兄から副

部長の座を剥奪しまして、本日からカガク部の副部長は雪那さんですね。」

「えっ？」

いきなりの『あなた副部長任命』に驚く雪那。

「ええつとですね。部長と副部長は、その部で最も階位が高い二人がなる事になってるのです。だから、智天使のお兄より、階位の高い雪那さんが副部長になる事になるんです。」

「だって、俺入ったばかりだし、それに、一つしか階位違わないんなら、大悟でも良いんじゃないか？副部長って何をすれば良いのか俺はわかんねえし。」

「基本、何もなくて良いですわ。仕事が多いのは部長の方ですから。」

「さいですか・・・」

「ちょいまち！！！うちから、副部長の座を取ったら何が残るんねん！？」

「という事で、書類の方は私が済ましておきますわ。では、宜しくお願いします。雪那副部長。」

「宜しくお願いしますね。雪那副部長。」

「えっと、宜しく。」

副部長と言つのがムズ痒いのか、恥ずかしいのか、頭をポリポリ掻きつつ頭を下げる。

「うちは無視なんか!？」

「3」

「2」

「1」

「どっかーん!!」

俊介「どうも、なぜなにカガク部の時間です。」

尚紀「このコーナーも本日で四回目。今回は化学部と生物部の副部長である、砂野<sup>すなの</sup> 神楽<sup>かぐら</sup>さんと大海<sup>おおみ</sup> 紫苑<sup>しおん</sup>さんに来てもらってるよ。」

神楽「漸く私達の出番ですか。」

紫苑「それより、このみが本編で出てて、アタシ達が出てないのが納得いかんぞ!!責任者出て来い!!」

俊介「落ち着いて下さい、御二方。それより、今回の御題行きますよ。」

紫苑・神楽「今回の御題は、皆さんに馴染み深い物『光ファイバ―』です。」

尚紀「光ファイバーの主な素材は皆さんご存知ですか？」

俊介「ええ。高純度の石英ガラスですよ。」

尚紀「そうだね。じゃあ、石英ガラスって何か知ってる？」

紫苑「ええっと、二酸化珪素（ $\text{SiO}_2$ ）だけで出来たガラスのことであったよね。」

神楽「二酸化珪素は、別名、無水珪酸・シリカとも言います。天然には石英、水晶、玉髄、瑪瑙、けい砂に含まれております。純粋な物は無色透明の固体ですが、大抵の物は不純物を含む為、有色です。」

尚紀「うんうん。勉強しているね。石英ガラスは、温度の急変にはとても強く非常に安定なんだけど、水酸化アルカリとフッ化水素に侵されちゃうんだ。」

俊介「作者の家はケーブルでしたっけ？」

尚紀「そうだねえ。安いからって理由でケーブルだったね。親に光にしてって頼んだけど却下されてたよ。」

月姫「それは遠方の大学に行った作者が悪いだけです。ところで、私の出番はマダなんですか？」

尚紀「姬ちゃんの出番は次の話だよ・・・恐らく・・・」

神楽「そう言えば、軍事部の副部長って誰？」



尚紀「えっと・・・俊介、あとはタッチ。」

俊介「軍事部副部長は桜之さんじゃなかったのでは？」

神楽「そうそう、桜之さくらの 供花きょうかさんでしたね。」

月姫「縁起の悪い名前ですね・・・供花くけですか・・・人に付ける名前じゃないですね。」

俊介「なんか、だらだらと長くなってきましたね。」

紫苑「じゃあ、これで終わりにする？」

尚紀「そうだね。皆さん、投稿する頻度が物凄く悪いけど見捨てないでね。」

## 第六話 墮天使

夜の黒い空・・・そこに突如、夜の空にも負けないほど黒い、靄のような物が出現する。

靄は、収縮を開始し、やがて鳥のような物を模る。

ぎゅ　　いいいいいいいいいいいい！！！！！！

鳥のような物は、居丈高に雄叫びを上げる。

その雄叫びは万物を震わせ、恐怖に陥れるほどの迫力があつた。翼を羽ばたかせ、飛翔を開始する。

「ども、坂野雪那さんに届け物つす。」

「ありがとね。」

宅配の少年（保安部所属・・・）が俺の荷物を届けに来てくれた。その数、ダンボール3個分・・・俺はそれを自分の部屋に持っていく。

一人じゃ無理なので、大悟を手伝い要員として徴集した。

そのおかげで、予定よりも早く終わり、ダンボールの中の物の整理を開始する。

ダンボールの中は、PDA、教科書、鞆、肌着、制服　アーミー柄の物と黒色の普通の学校の制服のような物の計2着が2セットずつ　と普段着　普段俺が家で来てる物と一寸も違うない物。っていうか・・・俺のサイズを何時の間に測った？

服等のサイズは恐ろしいほど、正確に測られており、雪那にピッタリな大きさだった。

「そや、ゆつきー。ええもん見せたらうか？」

「良い物？」

「そや。ゆつきーも男なら、あれを見たら眼福と思う筈や。」

男にとって良い物 眼福 エロ本？

まあ・・・俺も思春期の男だし・・・興味が無いと言ったら嘘だし、行ってみるか。

「ふん・・・行ってみようかな。」

出来る限り平然な態度で言う。

「よっしゃあ、うちについてき。」

大悟の後について行く事・・・数分。

俺達は、書架室に着いた。

まさか・・・書架棚にエロ本を堂々と置いてるといふ事は無いよな・・・女子も居るんだし。

「ここや、ここや。」

書架室の一番奥の壁をげしげしと行き成り大悟は蹴り始めた。

・・・？

そして、ガコンという何かが外れたような後、ゴゴゴツと言う音と同時に、壁の一部が横にスライドを開始した！！

隠し扉！！

「ふっふっふ、カガク部の部室を作ったのは何を隠そう、うちの能力でなんや。やから、あっちこっちに色々な仕掛けを作っちよるんや。」

自慢を開始した大悟を無視。

俺は、隠し扉の中に入る。

そして・・・俺は隠し扉の中に有ったある物を見て、呆然とした。

「どや？眼福ゆうたる。うちの最高傑作や。」

隠し扉の中の部屋の中には、この世の物とは思えないほどの絶世の美女がいた。

肌は雪の様に白く、目は月の様な金色、髪は腰まであるロング。

その風貌を、着ている黒のゴスロリが更に引き立てる。

俺は、その少女に見入ってしまった。

「すごい・・・なんて、美しいんだ。」

「せやろ、うちの『祝福<sup>ブレス</sup>』で創り出した、最高傑作やからな。残念な事を言ったら、生きとらんという事かな。うちの祝福じゃあ、心までは造れへんからなあ。って、ゆっきー？何しとんのや？」

気付いたら、俺は・・・その少女を抱きしめていた。

「すまん、ついつい。あまりにも美しいから、ついな。」

「そか。ゆつきーにもうちの芸術が分かるようやな。有香の奴に見せたら『お兄・・・末期だね。』なんてゆったんやで。ほんま、芸術の分からんやつや。それに比べ、ゆつきーはほんま分かつとるな。うちはメツチャ嬉しいで。」

この少女が・・・人形なんかで無く、本当に生きて動いていたら、どんなに素晴らしい事だろうか。

この子の拍動が聞きたい・・・声が聞きたい・・・

再度俺は少女に手を伸ばそうとした所で・・・

『アラート！！アラート！！堕天使が出現！！飛行型中型種が一匹、保安部及び戦闘班は至急迎撃に向かつて下さい。それ以外の生徒は最寄のシエルターに避難して下さい！！』

「これは・・・堕天使か！！ゆつきー、シエルターに避難するで！！」

直ぐに俺等は部屋から飛び出し、最寄のシエルター　つまり、部屋の地下　に避難する。

シエルターには既に、有香と近衛が避難していた。

「全員揃いましたですね。」

「そうみたいですな。」

保安部は・・・全員戦闘に参加・・・鈴音さんや綾斗さんは大丈夫かな・・・

「なんや、ゆつきーは心配なんか？大丈夫や。今回は中型でしかも一体や。大した事はあらへん。」

雪那の様子を読み取り、安心しろと宥める。

「まあ、中型ですものね・・・そこまで戦闘が長引くとは思えませんわ。」

そうか・・・保安部の皆さん・・・無事でいて下さい。

「マスター・・・」

少女は突如目を開き、歩き始める。  
何者かを求めるかのように・・・

「敵は中型一匹！！僕がまず地上に引き摺り落とすから、その後皆でフルボッコだ！！分かったかな？それでは、僕は行かせてもらおう。」

鈴音達は中型と言えども、人間から見るとかなり巨大な鷲を見上げていた。

「てかよ、この間みたいに一撃で仕留めるなよ。お前が飛行型を引き摺り落とす時って、大抵は死んでるんだよな。俺達は、ソロモンの指輪に生きた状態で封印しないといけないんだぞ。」

「あつはっは、別に死んだのを封印しても問題は無い！！封印したと言ふ事実があればそれで結構！！一撃必殺で行かせてもらつよ！！」

「やっぱ殺す気かよ!!」

鈴音は数歩程助走し、一気に上空に舞い上がる。

「今晚は焼き鳥が食べたくなるねえ」

腕を一振り。

それだけで、腕の裾から無数のワイヤーが伸び、鷲の体全体に絡まる。

キ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
！  
！

驚はワイヤーを解こうともがくが……逆効果で、更に絡まる。

そして、飛行する事が出来ず落下を開始する。地響きを上げ、地面に激突する。

ゴーン！！

近くで見ると、片方の翼だけでも10mくらいある。

「ふははは、一丁上がりだ。今回は死なない様に気をつけたから、バリバリ生きてるぞ!!綾斗、封印したまえ!!」

「いゝいゝ」

綾斗は中指に付けている指輪を鷲に当てる為、近付こうとした時・・・

・  
鷺が吼えた。

「回避！！」

綾斗は、瞬時に能力でその場を離脱。綾斗の後ろにいた、他の保安部部員は、副部長の叫びを聞き、上空や横に直ぐに飛んで逃げる。その直後、先程まで、綾斗や他の保安部のいた所に、クレーターが出来る。

「気を付ける！！風を操っている！！鈴音、生かした状態での封印はキツイから殺せ！！」

「だから、そうした方が楽って言うただろ！！ふっふっふ、一発で衝天させてあげるよ！！」

「全力全開！！1億ボルト放電！！」  
ディスチャージ

鈴音を中心に青白く発光する球体が出現し、それは大きさを徐々に大きくし、今だもがき暴れまわる鷺を飲み込む。だが、鷺の体全体が光沢を持ちだす。

「む？表面を絶縁体であるダイヤモンドにしたか？だが、ダイヤモンドは火に弱いのだよ！！赤坂！！一気にやってしまったまえ！！」

そう言い、鈴音は、鷺から降り、いったん距離をとる。

鷺は、ワイヤーでグルグル巻きにされてる為、やはり飛べない。

「了解！！」



赤坂と呼ばれる少年は、返事をすると同時に鷲の周りの空気が振動し・・・爆ぜた。

ギイイイイイーーーーー！！

鷲の苦しむ甲高い声。

「やったか!？」

だが、念には念を押してなのか、超電磁砲を煙の中の敵に向かって乱打しつつ鈴音が近付く。

「むっ!？」

煙の中から突如延びてきた触手の一撃を躲す。

「まだやるのかね？」

煙が晴れると、今度は鷲の表面の色は、燃え盛る赤。渦みtainな模様が、表面を移動している。

そして、渦の模様が歪みが更に捻れる。

捻れた歪みが元の形に戻ると・・・鷲の前方に巨大な炎球が出現。それを雄叫びと共に発射してくる。

炎球は緩慢な動きで鈴音達の方にやってくるが・・・突如、接触もしてないのに爆発。

地上で平面状に爆発が広がる。

部員の何名かは気付けず、爆発に巻き込まれる。

「くっ、こいつはしぶといな・・・調整中でもHRを持って来るんだっとな。」

「攻撃を受けた部員は、辛うじて防壁を展開できたから軽い火傷ですんだ。現在、部員の一人に救護室へ連れていかせてる。」

「ふう・・・了解。」

軽傷と聞いてホッとする。

「部長！！これからどうしますか！？」

「さあて、どうしようか・・・」

「遂に、LV4が出てきたわね。」

「ええ。しかし・・・これまでの物よりもタフイし、攻撃力や敵攻撃に対する対応法が変わりましたね。」

暗い密室で、衛星によって取られている保安部と堕天使の戦闘の映像をリアルタイムで時雨と空は見ていた。

「しかし、これで中級つてのが有り得ない強さよね。」

「そうね。」

時雨の言葉に軽く相槌する空。

「さてと・・・」

時雨はPDAを操作し始める。

「・・・何をやる気なの？」

「『夜叉』にせっちゃんを乗せるつもり」

「・・・一応、調整は終わってるわ。まあ、彼なら調整してなくても乗れるけどね。」

「それじゃ、せっちゃんを呼びますか」

「それにしても、戦闘が長いわね・・・」

すでに、1時間は経過している。中級程度なら、自衛隊ではなく保安部が出れば5分もあれば終わっている。それなのに、未だに戦闘終了の合図が無い。部屋には緊張した空気が漂う。

・・・綾斗さんたち大丈夫かな？

ピピピピピピ

そんな空気の中に、軽い電子音が響く。

「雪那さん、PDAが鳴っていますわよ。」

「本当だ。」

画面には時雨の文字。

「なんですか？」

『うふふふ、今保安部は大ピンチなの。』

PDAに保安部が驚のような何か苦戦している映像が流れる。

「!?!」

「なんですって!?!」

「ええ!?!」

「保安部が苦戦やて!?!」

意外な展開に驚くカガク部の面子。

『で、せっちゃんにお願いがあるの』

「俺にですか？」

『そうよ。至急軍事部に来て欲しいの。』

軍事部に？

『理由は着いたら話すわ。近衛さん、軍事部までのせっちゃんの護衛を頼めるかしら?』

「かしこまりました。」

『じゃあ、頼んだわよ。』

そう言つて、通信が切られる。

「雪那さん、行きますわよ。」

「はい。」

俺の前には・・・漆黒のHRがあつた・・・  
昼に来た時には・・・こんな物は無かつたぞ・・・

「来てくれて助かるわ。短直に言います。これに乗つて、墮天使を倒して欲しいの。」

俺が？

時雨の行き成りの発言に一瞬思考が停止する・・・

「雪那さんが乗るより、保安部の誰かに乗ってもらつたほうが・・・

」

行き成りの事に何も言えない俺の代わりに、俺の言いたい事を察した近衛が尋ねる。

「だめなの。この子は・・・貴方にしか乗れないの。」

「どうして、そんな事が分かるんですか。」

空は、少し考え・・・

「貴方が選ばれた存在だから。」

一言・・・

俺が、選ばれた存在？何にだ？

「もし・・・俺が嫌と言ったら・・・」

「保安部の皆は苦戦を強いられ・・・負けてしまっわ。今回の墮天使は何時ものと違うの。」

つまり・・・断れる状況じゃねえって事か・・・

「・・・俺がここで断ったら・・・皆を見殺しにしてしまっような物ですね・・・」

「そうね・・・」

深い溜息。そして、間を空けて・・・

「だから、本当に御願い・・・」

時雨は地面に跪き、土下座をする。

「御願い・・・あの機体は貴方にしか乗れないの・・・」

俺にしか・・・出来ない・・・俺が・・・やらないと!!

「やります!!」

「雪那さん・・・」

「ありがとうございます!」

「何時でもOKです!!雪那さん、こっちに来て搭乗の準備をしてください。」

「はい。」

搭乗する為に必要と渡された物は、物凄い薄い全身タイツのような服。

それと、頭に着ける、ヘッドギアのような物。

ヤベエ・・・この服恥ずかしすぎる・・・

『雪那さん、搭乗して下さい。』

HRの背中部分が上に持ち上がり、椅子が外部に出てくる。

俺はHRによじ登り、椅子に座る。

俺が座ると、椅子はHR内部に戻される。

HR内部はモニターも無いし、スイッチやレバーの類は一切無い。ただ光が遮断された、真っ暗な部屋と同じ。

『搭乗しましたね。今から、シンクロを開始します。この子を、『夜叉』を信じて、心を開いて頂戴。そうすれば・・・高シンクロが可能な筈よ。』

スピーカーは当然の事が、内部に搭載されてる為、空の声が聞こえる。

「はい・・・」

信じる・・・？こいつをか・・・

『シンクロ開始して！！』

『了解！！シンクロ開始します！！』

『機体との一次接触開始。』

『機体との相互相違率の測定開始！！』

『機体との波長形状の一致率9割9分9里！！』

『機体名『夜叉』の人工知能より接触が開始されました！！』

アダム・・・ああ、貴方なのね

接触開始が始まると、頭の中に女性の声が響く。

「っ！！空さん！！今の声は何ですか！？」

突如聞こえた、誰の声かも分からない謎の声の持ち主を尋ねる。



『夜叉の声よ。』

じゃあ、アダムって何の事だろう？後で聞いてみよ。

『人工知能との波長形状一致率9割9分9里・・・ありません・・・』

波長形状一致率が、どちらも常人では出しえないスコアの為、軍事部の一人が啞然とする。

『機動必要同調率の越境を確認!!』

『機体との二次接触を開始!!』

『言語形態を日本語に設定!!』

『双方向回線を接続!!』

『操縦士へ機体の視覚及びその他の情報の転送を開始!!』

ピリツという電気刺激の後、俺の目に映るのは暗い空間ではなく研究上の風景。

そして、他の人や物が小さく見える・・・これが、LBSなのか・・・  
すごい・・・俺が大きくなったような感じだ。

『全ての過程を完了。』

『機体の拘束具を解除!!』

『内部電源充電完了!!』

『いい、H Rの稼働時間は30分。ただし、飛行やその他の電子装置を起動させた場合はエネルギー消費が2倍になります。』

「つまり、飛行をすれば、稼働時間は15分。飛行と何かしらの電子装置を使えば、10分って事か？」

『その通り。で、基本貴方の考えたように、この機体は動くようになっています。』

「はい。」

『御願いね・・・無事に帰ってきてくださいね・・・私は、支部長として皆さんの上に立つ者ですが・・・何もできない無能な自分が悔しいです・・・子供達に頼らないといけないという事が・・・』

「・・・安心して下さい。俺は無事戻ってきます。ちゃちゃっと、墮天使とやらを倒してきます。」

『御願いね・・・』

『機体名『夜叉』発陣します!!』

さあて・・・行くぞ!!

御意

「うん・・・こいつは・・・どう言う事だい？」

「切りがねえな。」

鈴音の愚痴に綾斗が相槌を打つ。

確かに愚痴が出て仕方の無い状況である。

堕天使は、どれだけ攻撃しても、全く傷を負った様子が無いのだ。木端微塵にしても、肉片が集合し、元の形に戻る・・・全く堪えた様子一つせず。

保安部の戦闘員も、ほぼ壊滅。戦闘可能なのは鈴音と綾斗と赤坂の3人だけとなった。

「参ったつすね。これまでのと強さが格段に違うつす。部長、核でも撃って始末するっすか？」

「ふふふ・・・それは最終手段だよ。一先ず、弱点を見つけないとね・・・」

膝を地面に着け、荒く呼吸する。予定外の長期戦の為か、かなりの疲労が溜まってきているのが、目に取れる。

「じゃあ、俺が限定解除しようっすか？壱段階解除ならたいして負担は無いっす。」

「それもダメだ。壱段階といえども、堕天化が早くなる。するなら・・・僕が・・・」

「お前はダメだ。この間も壱段階解除をしてただろ。俺がする。」

キエエエエエエエ！！！！！

俺を無視かよ！！と、驚からの攻撃が飛んでくる。

『保安部の皆さん！！直に救援が届きます！！それまで、墮天使の動きを封じて下さい。』

PDAから時雨の声が発せられる。

「むつ、救援だと？自衛隊か？」

『いいえ。それは着いてからの御楽しみ』

「ははっは！！それは楽しみだ。それじゃあ、最後の気力を振り絞り・・・本気を出させてもらおうよ」

「壱段階解除波無しだぞ。」

「勿論 行くぞ、化け物」

鈴音の体が発光。そして、周辺に散らばっている、クナイのような物が浮遊し・・・

「撃てい！！」

発射！！

超電磁砲の球代わりにクナイを使用。

「行くつすよ！！」

大気中の酸素と水素濃度を変更する。

そして、指パツチンの時発生する静電気で着火。  
空気の波が一瞬揺れ・・・

「うおっしゃあ!!」

両手にバズーカ砲を一丁ずつ構え、発射!!

発射したバズーカ砲のミサイルが・・・銃口から出ると同時に消える!!

鷲を中心とし・・・大爆発が発生。

大量の爆煙が立ち昇る。

グチャツ!!

辺り一面に散らばる、鷲を構成していた、肉、骨、皮膚、羽、臓器・  
・etc。

しかし、時間が戻るかのように、それらは引き合い、元の形に戻る。

「攻撃を止めるな!!」

飛ばす物がもう無い為か、右手を銃の形にして人差指から、電気  
の弾丸を発射する。

電気と言うのは、1万ボルトにつき射程は1メートル程度。それを  
何十メートルも先にいる敵に向け乱射しているのだ。

体には相当の負担が掛かっているのだろうか、時々目を顰める。

「はいっす!!」

赤坂は、今度はライターを取り出し。ライターに火を灯す。

そして、その状態で敵に投げる。鷲に当たる瞬間、爆発が発生。更に、爆発した場所に辺り一面の酸素と水素を供給。

爆発が断続的に、鷲周辺で発生し。再生しようとしていた物を更に爆砕。

「綾斗、ソロモンの指輪を投げろ!!」

「あいよ!!」

ソロモンの指輪と言う堕天使の封印具を投擲。指輪は鷲に当たるが・・・何も起きない・・・

「「「えっ?」「」」

・・・もしかして・・・こいつは本体じゃないのか?じゃあ、本体は何所だ!?

その時、何かが音速で接近し、突風が発生。

「むっ?あれは・・・!!HR?でも、僕のではない・・・あの機体は・・・」

敵発見・・・でも・・・粉々になっても生きてるんだけど・・・

いえ、あれは・・・本体が創り出した、偽物ですね。本体を探します。『天使の目』を作動します

頭の中に波が広がるイメージが流れ込んでくる。一部の波が何かに

当たり、反射してきた。

発見！！上空1000ftに敵生命体のコアを発見。封印に向かいます

おうっ。行くぞ！！

夜叉は、足からバーニアを噴かせ、一気に上空へと昇る。

それを見た、地上の鷲は、本体の危機を感じ上空に昇ろうとするが、  
・何かに引っ張られ、再度墜落する。

「君は逃がさないよ」

一気に上空に昇った、綾斗達の前にあったのは、巨大な赤い色の球体。

これは・・・

敵のコアです。破壊しましょう

ああ。

夜叉は腰に収納していた単分子カッターを取りだし、コアに突き刺す。  
すると、コアに輝が入り、パリンツという割れる音と共に、空に霧散していく。

「敵生命体のコアを破壊しました。」

『ナイス！！グッジョブよ！！そのまま、軍事部まで帰投しちゃって頂戴。』

「了解。」



## 第六話 堕天使（後書き）

四ヶ月ぶりの更新です。

遅くなってまことにすみません。

言い訳じゃないんですが、オリジナルって二次創作と比べて作りにくいんです・・・

アイデアや基盤がなかなか作れなくて・・・

次はもっと早く投稿できるよう努力します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8386e/>

---

戦え、日本錬金術協会カガク部

2010年10月10日01時32分発行